

ヒラメ漁獲量の動向と稚魚の出現状況

1. 令和3年のヒラメの漁獲状況

茨城県におけるヒラメの漁獲量は H23 年以降増加傾向でしたが、H27 年をピークに減少傾向に転じ、R3 年は 179 トンと R2 年よりやや少なく、H27 年以降で最少となりました(図 1)。

次に、本県沖のヒラメ資源動向の評価指標である沖合底曳網と 5 トン以上の小型機船底曳網の漁獲量から計算した 1 日 1 隻あたりの漁獲量 (kg/日・隻) の推移について、漁獲量が減少してきた H30 年から R2 年の平均と R3 年とで比較すると、冬から春に向けての減少傾向、9 月から冬に向けての増加傾向は類似していますが、特徴として次のことがあげられました：①1 月上旬から 4 月上旬にかけての減少、②4 月下旬から 5 月上旬にかけての増加、③10 月中旬の減少、④12 月の増加。

それぞれの理由については、①は同時期のヤリイカの 1 日 1 隻あたりの漁獲量が過去 3 か年平均より高かったことから、ヤリイカ漁が主体でヒラメ狙いの操業が減少したため、②は①と反対にヤリイカからヒラメに漁の主体が移ったため、③及び④はヒラメの漁場への移動時期が平年と異なったため、と考えられます。

2. 令和3年生まれの稚魚の出現状況

水産資源の動向は、漁獲状況に加えて、産卵量や仔稚魚の生き残りに関わる環境条件等が影響します。当场では 4~12 月に月 1 回、鉾田市玉田沖 (距岸 0.25~2.0 マイル、水深約 6~20 m) で、その年に生まれた稚魚の分布密度を調査しています。今年生まれの稚魚は 1 年後には約 30 cm に成長し、漁獲されるようになります。

R3 年における稚魚の最大分布密度は 6.5 尾/1,000 m² で過去 20 年の最大分布密度の平均値 (11.5 尾) を下回りました (図 3)。稚魚密度の低下により、翌年以降の漁獲加入量が減少する可能性があるため、特に小型漁の漁獲が増える 9 月以降の漁模様に注視したいと思います。

(定着性資源部 水谷宏太)

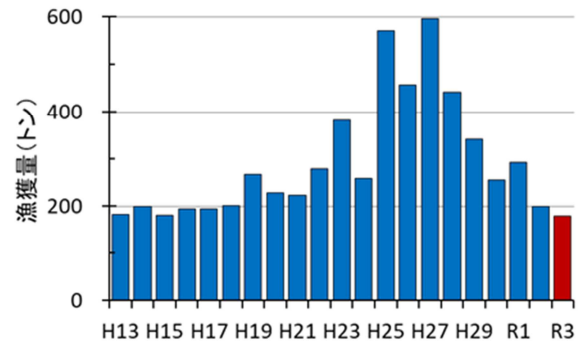


図 1. 過去 20 年の茨城県のヒラメ漁獲量の推移 (1~12 月、属地集計)。

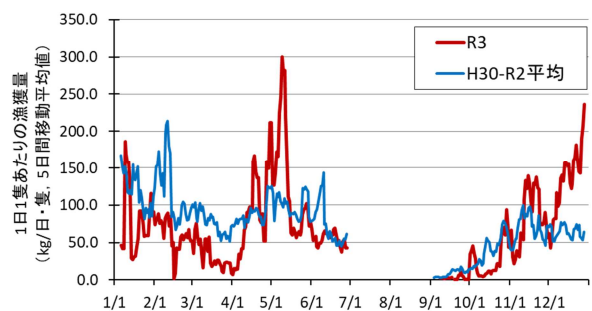


図 2. 茨城県内の底曳網漁船 (沖底+小底 5 t 以上船) における 1 日 1 隻あたりの漁獲量の推移。

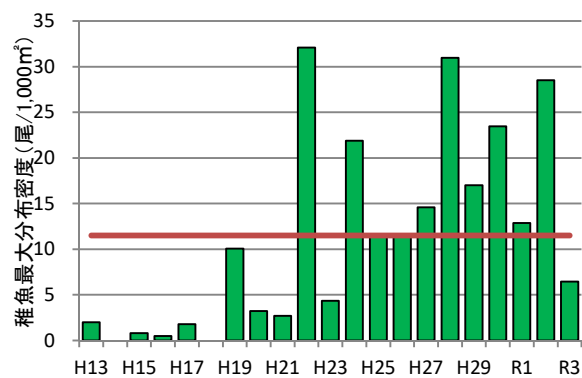


図 3. 玉田沖におけるヒラメ稚魚の最大分布密度の経年推移。横線は過去 20 年の最大分布密度の平均値を示す。